（海外）出張報告書　　2013年10月 2日提出

氏名	森脇　潤
所属	獣医学研究科　野生動物学教室
学年	博士課程３年
出張先	Brigham Young University (アメリカ,ユタ州,プロボ)
出張期間	平成 25 年 9 月 14 日から平成 25 年 9 月 21 日
目的	2013 年 9 月 15 日から 9 月 20 日にかけて、アメリカ　ユタ州 Brigham Young University で開催される第 22 回 国際クマ会議に出席して、ポスター発表を行う。また、世界的なクマ研究者から最新情報を得ることで、今後の研究へのフィードバックを行う。 http://ce.byu.edu/cw/bear/

活動内容

2013年9月15日に開催された第22回 国際クマ会議に出席したので活動報告する。開催地のアメリカ ユタ州は、アメリカ西部に位置しており、50 州ある中で 13 番目に大きい州である。首都は 2002 年冬季オリンピックが開催されたソルトレイクシティーであり、今回会場になった Provo へはソルトレイクシティー国際空港から電車で 1 時間半程度を要する。Provo は、アメリカ・ユタ州の 3 番目に大きな都市で、ソルトレイクシティーの 69 km 南方に位置する。Provo の中心には教会があり、2010 年ごろに火災により多くが焼け落ちてしまったが、住民の希望により修復され、新たに街のシンボルとして神殿として改修する作業が進められている。Provo には大きな Brigham Young University というキリスト教系の私立大学があり、今回、国際クマ会議の世話を行った大学が存在する。

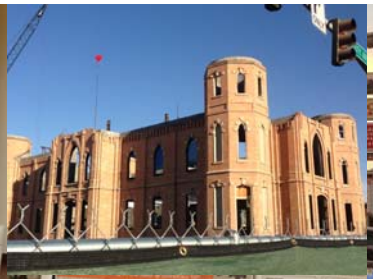
国際クマ会議は、前回インドで行われたのに引き続き 22 回目で、世界各国のクマの研究者およそ 300 名が参加した。123 演題の口頭発表と 96 演題のポスター発表が 6 日間を通じて行われた。演題対象としているクマは、ホッキョクグマ、グリズリー、ヒグマ、マレーグマ、(アメリカ、アジア)クロクマ、メガネグマ、ナマケグマ、アンデスグマ、ジャイアントパンダなどの種類を対象に、冬眠、繁殖・生理、保護管理、ハンドリング、生態学、遺伝学、軋轢問題、保全についてのセッションあるいはテーマがもうけられ、発表が行われた。日本からは、今年度、日本哺乳類学会賞を受賞された小池伸介氏をはじめとして 8 名が参加した。演題は、冬眠の生理学の分野を中心に構成されており、昨年度、Leading Program の支援でインターンシップの視察に伺った Washington States University の O. Lynne Nelson 氏が招待され、無麻酔下

で冬眠中のグリズリーの心臓の拍動の変化についての最近の知見について講演された。日本では、ヒグマについて無麻酔下で心臓の拍動の変化を追うことは難しいことであるが、活動期に超音波プローブを直接当てているクマがおとなしくしていることに驚いた。一般講演では、特に日本では考えられないほどの広域なヘアートラップを実施して個体数推定を行っている事例や、スカンジナビアのように大規模な捕獲・標識を行う１つのプロジェクトに多くの研究者が関わって構成されるテーマが多く、我々の規模のものに比べてはるかに多くの時間と労力を費やしている内容で、日本のグループワークの規模の小ささと作業効率の悪さを残念に思った。さらには、おそらく大学院生の発表でも、切り口が面白く「こんなことができるのか！」と、驚く演題もあった。

2 日目の午後に、ポスター発表する機会が設けられていた。1 時間 45 分のコアタイムの中で、今回、私は、「北海道のヒグマにおける繁殖パラメータ」について発表を行った。このテーマで、各国の研究者と英語でディスカッションすることに恐れていたが、質問される内容は、連れ子の数や私の名前の読み方？など色々な角度からあり、驚きもあったが、当歳子の死亡の算定方法を聞く機会が持て、今後の研究の進展に寄与する内容であった。しかしながら、発表のテーマの選択としては、参加者にとって死体を用いた解析ではもはや印象が薄く、生体を用いた生理学、遺伝学の興味が強いと感じた。つまり、別のテーマで進行中のヒグマの血縁関係解析のほうが、印象を集めやすいと感じた。遺伝的識別に関して、一般演題の中にも多くの事例報告があったが、やはり、ヘアートラップといった痕跡調査を利用する手法が主で、直接観察による事例は少なかった。もし今後、直接観察を行っているヒグマの家族関係解析のテーマで参加する機会があれば、注目を集められ、活発な議論が交わすことができるのではないかと期待している。

国際会議に出席して、自分の研究内容をいかに相手に伝えていくか、どのように研究を発展させていくか実践を行う貴重な機会となった。今後も、「One Health に貢献する獣医科学グローバルリーダー育成プログラム」の取り組みにより、国際感覚の涵養、プロフェッショナルとしての自覚、自主性・主体性の醸成に努め、全体像を俯瞰できる能力を養い、実践能力のある専門家としての「博士」を目指して行けるよう精進していきたい。今回、海外で発表する機会を設けていただいた、野生動物学教室坪田教授、下鶴准教授に感謝します。また、Leading Program のスタッフの皆様、コーディネーターの堀内先生に感謝いたします。最後に、ポスターが完成するまで遅くまで付き合っていただいた野生動物学教室の皆様、どうもありがとうございました。

図.　左上　Salt lake city を走る列車
　　左下　講演を行う Nelson 氏
　　右　会場入口のウェルカムベアー



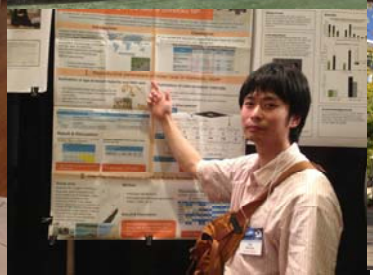
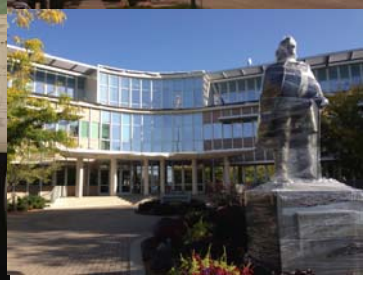



図.　左上　改修中の教会
　　左下　ポスター発表を行う報告者
　　右上　Provo の景観
　　右下　Brigham Young 卿と講義棟